第４９回大会　２０１６．８．４～８．５

会場；国立オリンピック記念青少年総合センター

８月４日（木曜日）

○　開会式　（１２時５０分～１３時００分）

研究会会長挨拶、大会オリエンテーション（各会場にて）

【１３：００～１４：４０】

１Ａ「言語発達遅滞の評価と支援」　**東京学芸大学　藤　野　博**

言語発達の障害には、自閉スペクトラム症（ＡＳＤ）を背景とする場合や、音声言語のみに問題のある特異的言語発達障害（ＳＬＩ）などがあります。また、会話の困難を主な問題とする社会的（語用論的）コミュニケーション症も最近注目されています。本講義ではそれらの障害についての概説、アセスメントと指導の方法、遊びの中での支援法などについて最新の情報もまじえ基礎から講義します。

１Ｂ「吃音の基礎知識と新たな視点」　**東京学芸大学　伊藤　友彦**

吃音については不明な点が多いことは事実です。しかし、周囲の人々の態度や対応がとても重要であることは明らかです。吃音に対する望ましい態度・対応のためには、その発生に関する知見など、吃音に関する基礎知識が不可欠です。この講義では、これまでの研究で明らかになっていることと、現在、明らかになりつつある最新の知見をわかりやすく紹介し、指導、支援の方向について述べたいと思います。

１Ｃ「難言教育における子どもとの関わり及び教室経営の基礎・基本」

国立特別支援教育総合研究所　牧野　泰美

難言教育は連携の教育でもあります。きこえとことばの教室において個々に必要な指導を行い、その効果をより高めることだけでなく、子どもがより暮らしやすくなるためにも、通常の学級、家庭、関係機関等との連携を上手く図っていくことが重要です。ここでは難言教育における子どもとの関わりと、周囲との連携も含め、子どもを支援する上で大切にしたい教室経営の基礎・基本についてお話しします。

【１５：００～１６：４０】

２Ａ「聴覚障害児の評価と支援」　**筑波技術大学　大鹿　綾**

聴覚障害と一言でいっても非常に個人差が大きいものです。一人一人の実態を適切に捉えるために、まず聞こえの状態を示すオージオグラムの読み取りと、聴覚障害の種類・特徴について理解しましょう。併せて、補聴器や人工内耳の効果と限界、それを補助する手段についてお話しします。発音や聞き取り、言語力のアセスメントについても概説します。また、手話をめぐる現状についてもお話しします。

２Ｂ「吃音児の理解と支援の実際」　**国際医療福祉大学　前新　直志**

吃音の変動性には個人差があり、かつ個人内でも出現条件に一貫性があるとは限りません。このように可変性が高い性質に加え、他の障害が併発した場合の吃音指導が容易でないのは当然です。さらに併発する障害特性は広範囲であり、その程度に応じた指導を検討する必要があります。吃音の特性や他の障害との関係を踏まえ、今回は構音障害や発達障害を併せ持つ場合の指導や支援について考えます。

２Ｃ「発達障害児の理解と支援」　**船橋市立三咲小学校　大山　恭子**

発達障害のある子どもは、同じ障害であっても困り感は人それぞれです。そのため、効果的な支援を行うためには、子供の特性を把握し、その子供にあった手だてを考えていく必要があります。この講座では、障害の特性とつまずきに応じた様々な支援方法や、学級担任や保護者、医療との連携のポイント、学級の子供への理解の促し方についてご紹介します。

【１７：００～１８：４０】

３Ａ「構音障害の評価と支援」　**元西東京市立保谷小学校　中村　勝則**

構音の指導は、適切な評価に基づいた発語器官の動きを育てる「口作り」の指導と正しい発音と誤った発音とを素早く正確に聞き分ける力を育てる「耳作り」の指導、そして、これら二つの指導の成果を土台に正しい発音が日常の会話で自然に使えるようにする「音作り」の指導で構成されています。子どもの改善意欲を高めながら、どのように指導を展開するのかを事例の話を交えながらお話ししたいと思います。

３Ｂ「聴覚障害児の支援の実際」　**筑波技術大学　長南　浩人**

発達の早期に聴覚障害を有した子どもの多くは、言語や認知、学力、社会性など精神発達の多様な面で健聴児とは異なる育ちを見せるといわれています。本講座では、その具体例を紹介し、心理的考察を加え、聴覚障害児が見せる「育ち」と「なぜ？」を考えます。さらに、これに呼応させた教材解釈、発問づくり、評価、教材教具作成、加えて日々のコミュニケーションの在り方を検討します。

３Ｃ「言語発達遅滞の支援の実際」　東京学芸大学　大　伴　　潔

本講座では、「語彙を育てる」「文を構成する」「文章で表現する」「効果的に伝える」といった言語領域の発達過程を概観しながら、適切な支援目標の立案と、興味を持たせる課題を通した支援について考えていきます。言語評価法の例として学齢児版のアセスメント「ＬＣＳＡ」を取り上げ目標設定のあり方を考えるとともに、言語発達支援の効果的なアプローチについて検討します。

８月５日（金曜日）

【９：２０～１１：００】

４Ａ「事例検討の意義と進め方」　有明教育藝術短期大学　羽 田　紘 一

言語障害児の指導を進める際には、子どもの状況の改善に適した指導が行えているか否か、指導を一定期間進めた時点で検証する必要があります。その検証の方法としては、「事例検討・事例研究」を定期的に行うことが有効です。この講座では、『短縮事例法』という方法の紹介と演習を行います。

４Ｂ「側音化構音･口蓋化構音の指導Ⅰ～歪み音の理解と聞き取り」
帝京平成大学　山下　夕香里

側音化構音や口蓋化構音は歪み音なので慣れていないと聞き取りが難しく、指導で悩まれる先生方が多いのが現状です。いろいろなお子さんの発音の動画を見ていただき、聞き取りのポイントや舌の動きの観察法についてお話しします。はじめての先生方も是非ご参加下さい。

４Ｃ「ことばが育つ子ども支援と保護者支援～幼児期のことばの相談」
國學院大學　野 本　茂 夫

この講座は、子どもがより良く育つこととそのための子育て支援を視野に入れ、幼児のことばや聴こえ、人とのコミュニケーションに関わる問題にどう対応したらよいか考えます。人生の基礎基本が育まれる幼児期のことばの問題は、背景にことばの育ちに深くかかわる多様な要因があります。また、ことばの問題に絡んで気になる発達障害の対応も含めことばの教室での相談・支援のあり方を考えます。

【１１：２０～１３：００】

５Ａ「子どもの発達を促す関わりことば」　公益社団法人 発達協会　湯 汲　英 史

子どもの発達の目的は、「自分で考えて判断し、適切な振る舞いが取れるようになること」とされます。白紙で生まれてくる子どもは、判断基準を獲得する必要があります。判断基準を「関わりことば」とし、紹介します。また発達障害のある子は、「人と関わるときに使うことば」の学習にも問題を持ちます。どういうことばを言えるようにしたらいいのかについても、具体的にふれます。

５Ｂ「側音化構音･口蓋化構音の指導Ⅱ～舌を平らにする方法」　帝京平成大学　山下　夕香里

側音化構音や口蓋化構音のお子さんは、発音時に舌の奥がもりあがり、前に出そうとすると細長く緊張します。舌を横に広げて平らに保ち、舌の横の感覚や舌先のコントロール性を高めると音の指導がやりやすくなります。舌のトレーニングを実際に体験していただきたいと思います。鏡、舌圧子、ストロー（細いもの）、ペンライトなどをご用意ください。ご一緒に練習してみましょう。

５Ｃ「事例で学ぶ描画テストの解釈」　國學院大學　石 川　清 明

検査対象の幅が広く、実施が簡便なので様々な分野で使用されている描画テストをコミュニケーションに障がいがみられる幼児や児童の指導、保護者への助言や相談に活用しようとする際の、実施から解釈の基礎を演習形式で学びます。今回は樹木画を中心として家族画も取り上げます。鉛筆（2Bor4B）と消しゴムを持ってご参加ください。

○　閉会式　　次回大会のお知らせ

【１３：００～１３：０５】